

栃木の子どもの学力向上を図る授業改善プラン

—小学校・国語— vol. 2

平成 17 年 9 月 栃木県総合教育センター

平成16年度教育課程実施状況調査（小学校5学年の内容）の結果から、今回は、「書くこと」や「話すこと・聞くこと」との関連を図った「読むこと」の指導及び「読むこと」への興味・関心を高める指導の工夫について述べます。

ペーパーテスト調査結果からみえた課題

「目的や意図に応じて、文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえること」、「自分の考えを明確にしながら読むこと」、「優れた叙述を味わいながら読むこと」については、問題によって通過率が設定通過率をかなり下回っています。

例えば、今回出題された次のような調査問題について考えてみましょう。

本県の通過率	54.6%	全国の通過率	52.4%	設定通過率	70.0%
--------	-------	--------	-------	-------	-------

次の文章は読書について説明したものです。よく読んで、あとの問いに答えましょう。

（本文省略）

五 この文章は、「読書のよさ」について書いたものです。筆者が書いている「読書のよさ」の中から一つ選んで、そのことについてあなたの考えを、あなたの自身の読書体験もあげながら、次のげんこう用紙に百字ぐらいで書きましょう。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線（＝）で消したり、行間に書き加えたりしてもかまいません。

（～～線は原文にはない。）

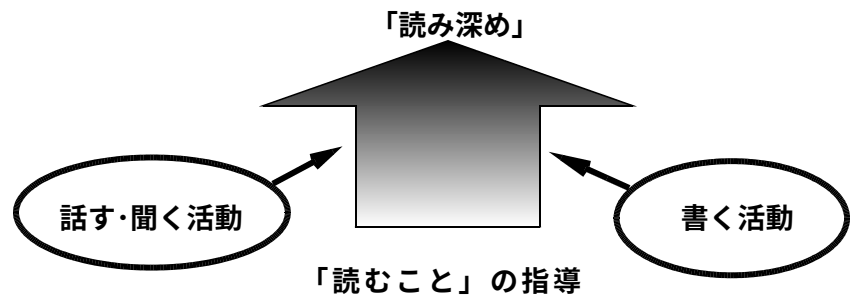
【出題のねらい】

- ・ 目的や意図に応じて、文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえること
- ・ 書かれている内容について事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にしながらかくこと

上記の問題の通過率は、本県の平均及び全国の平均ともに6割に達していません。問題文の～～線部のような設定での記述式に慣れていないために、実力が発揮できなかった児童も多かったと考えられます。このことから、文章を正確に読み自分の考えを付け加えながらまとめていくような学習活動が、国語の授業の中で十分に取り入れられていたかどうかを点検してみる必要があるのではないのでしょうか。そこで、「読むこと」の指導を進めていくうえで望まれることを以下に示しますので、指導の参考にしてください。

書くこと、話すことと関連させて、読み深める体験をさせましょう

文章を読み、より深く筆者の意図や作品の主題を理解したり、自分の体験に引き寄せて読み深める力を身に付けさせるためには、授業の中で、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」と「読むこと」を意図的に関連させた学習活動を組むことが有効です。



以下に二つのポイントを提案します。

1 読んだことをもとに、引用しながら自分の考えを書く機会を増やしましょう

自分が読んだことについて、分かったことや感じたことを書いてみることは、自分がどこまでその文章を理解したのか、自分が感じたことは何なのかを明確に意識できるよい方法です。そこで、教材を繰り返し読む過程で、自分の考えを書く活動を位置付けるようにします。その際、根拠となる文や語句を意識させながら、自分がなぜそう感じたのかを考えながら書かせると、その時点での自分と文章との関係がより明確になります。

例えば、『注文の多い料理店』を人物の心の動きを想像しながら読む場合、「二人の紳士は、どのような人物として描かれているか、まず、○～○ページの中の文や言葉を引用して説明しましょう」などの課題を設定し、ノートやワークシートに自分なりの考えを書かせるようにします。このように、「文中の言葉を使って」などの条件を付けた発問を設定し書く活動につなげると、読みの焦点化を図ることができます。

なお、このような活動を進める場合には、次のようなことに留意する必要があります。

- 漠然とした発問ではなく、文や語句を手がかりにして考えられるような発問を工夫する。
- 根拠となる文や語句を児童自身が発見できるようなヒントを用意しておく。
- 書き始める前に、短時間でも2人組で話し合わせるなどして、個人の読みに自信をもたせる。
- 児童が書くことに抵抗感を感じている場合は、根拠となる文や語句を引用して自分の考えを述べる書き方を教師が例示しておく。

また、児童が何度も繰り返し読み、根拠となる文を見付け、それを用いながら自分の考えをまとめることができたときには、賞賛し自信をもたせるようにしましょう。このことも、主体的な一人読みができるようになるための大切な支援です。

2 ノートを活用して豊かな「読みの交流」を成立させましょう

読みを深めたり、考えを広げたりするためには、自分なりの素直な感じ方や考え方を発表したり、友達の意見や感想を聞いたりして、他者との「読みの交流」を図ることが大切です。このような読みを深める学習活動の流れを簡単に表すと、右図のようになります。

「読みの交流」を成立させるためには、効果的なノートの使い方を指導しましょう。例えば、下図のように「自分の考え」、「友達の考え」、「話し合ったこと・まとめ」などの項目ごとにまとめさせ、自分や友達の考えを明確化させることは、読みを深めたり、考えを広げたりするのに有効です。

読み深めるための学習活動の流れ

- 1 学習課題を理解する。
- 2 教材文を課題意識をもって読む。
- 3 学習課題について2人組で話し合う。
- 4 ノートに自分の考えを書く。
- 5 自分の考えを発表し、友達の考えと比べる。
- 6 話し合いをもとに、自分の考えをもう一度まとめる。

『注文の多い料理店』における
児童のノートのレイアウト例

【話し合ったこと・まとめ】	【自分の考え】 ○行目の「けしからんね」という言葉から、自分勝手でもいばっている感じがする。 【友達の考え】 動物が好きではないしんしたただと思う。それは、「鳥やけものが一匹きもいやがらん。」という言い方をしているから。	【学習課題】 〇〇ページで、二人のしんしは、どのような人物としてえがかれているか、文中の語句を引用して説明しよう。
----------------------	--	---

このように、ノートを活用して「読みの交流」をすることで、児童は教室で読むことの楽しさを実感できるのではないのでしょうか。

児童及び教師質問紙調査結果からみえた課題

- ・児童が嫌いだと感じている割合が比較的高い学習活動は、上位から順に「感想文を書くこと」、「説明や発表をすること」、「記録や報告書などの文章を書くこと」、「いくつかの文章を読み比べること」、「読んだ後に関連した他の文章を読むこと」となっています。
- ・教師は興味を持ちやすいと思っているが、児童が嫌いだったと感じるといった意識のずれがみられる学習活動は、「読んだ後に関連した他の文章を読むこと」、「文学的な文章を読むこと」などです。教師はこれらの学習活動について興味を持ちやすいと考えていますが、むしろ児童は理解しにくかったり、嫌いであると感じたりしています。

◇「文学的な文章を読むこと」についての教師と児童の意識のずれ◇

児童	好きだった 33.4%	嫌いだった 40.7%	無回答 25.9%
教師	児童が興味を持ちやすい 61.8%	児童が興味を持ちにくい 16.7%	どちらとも言えない 21.5%

上の表に見られるような児童と教師の意識のずれを、みなさんはどう考えますか。児童は「読み」の授業で達成感を味わえているのでしょうか。教師の思い入れにつきあわされたり、誘導されたりしている場面はないでしょうか。私たち教師は児童の評価を真摯に受け止め、もう一度自分の授業を振り返ってみる必要があるように思われます。国語科の授業での「読むことの指導」について、先生方からこんな声も聞こえてきます。

- 文学的な文章・説明的な文章でも時数が少ないために、児童自身に考えさせるような時間が不足していて、教師の解釈を押しつけるような授業になってしまう。
- 教材文を読みとるために、紙芝居を作るなどの工夫をしたが、活動ばかりになってしまい読みとることがあまりできなかった。
- 登場人物の気持ちを読みとろうとするが、様々な意見が出てきてまとめられなくなってしまった。
- 授業を始めようとすると、児童に「また登場人物の気持ちを考えるの？」といやそうな顔で聞かれてしまった。
- 読書へと発展する教材文で、部分的にしか扱えなかったのですが、これでいいのか不安です。

このような負担感や不安感を教師がもってしまえば、児童は「読むこと」の楽しさを見いだせるわけがありません。そこで、「読むこと」の指導の留意点について考えてみましょう。

文学的な文章を「楽しく」、「確かに」読めるよう、指導を工夫しましょう

1 読むことのねらいを明確にして、言語活動を効果的に活用しましょう

学習指導要領には言語活動例が示されていますが、そのねらいは次の通りです。

- 「読むこと」を詳細な読解だけではなく、活動的に楽しんで学習することができることを重視する。
- 児童が言語活動を通して、主体的に自分で考えて読むことができるようにする。

しかし、意識調査の結果や先生方の声からは、活動ばかりになってしまって、どのような読みの力が付いたのかが児童にも教師にも曖昧になっている状況がみられます。例えば、文学的な文章を通読し言語活動をなんとなく行っただけで単元が終わってしまうということもあるようです。

そこで、「動作化をすること」、「紙芝居を作ること」、「登場人物に手紙を書くこと」、「解説のパンフレットを作ること」などの言語活動を取り入れる際には、それらの活動が読むことの学習としてどのような意味があるのかを押さえておくことが大切です。次に、言語活動を生かした「読むこと」の指導についての留意点を示します。

○教材の特徴を踏まえた言語活動を取り入れる

単元のねらいを達成するために言語活動を取り入れる際、作品の特徴をつかんで設定することが大切です。事前にしっかりと教材研究をすれば、例えば「Aという作品では場面の移り変わりをとらえるために、紙芝居を作ることが適している」、「Bという高学年の作品では、登場人物の気持ちの変化や成長に気付かせるために、主人公への手紙を書かせることが効果的である」などのような作品へのアプローチの方法がみえてきます。

○教材文の文章を根拠にして、言語活動を進めさせる

動作化をさせたり、場面の絵を描かせたりしていると、児童は自分だけの想像で活動を進めていってしまう場合があります。何度も本文に立ち返らせ、教材文にはどう書かれていたかを考えさせることが重要です。目的をもって繰り返し読み返すことによって確かな読む力が育ちます。

○学習で押さえるべき語句や文を意識して活動を支援する

紙芝居や動作化した場面や吹き出しのせりふなど、言語活動で児童が表現したものが、教材文のどの部分を根拠にしているのかを常に問いかけながら教師は指導していく必要があります。そうすることで、教材文の中で押さえないキーワードや中心となる文、注目させたい接続語など、「どうしても押さえておきたいところ」を児童に意識させます。このような教師の積極的な関わりのある言語活動の中で、「叙述に即して正確に読む力」が伸びていくのではないのでしょうか。

2 児童が教材文から感じたり考えたりしたことをもとに、授業を組み立てましょう

初発の感想から授業を組み立てる

児童が、文学的な文章を読むことが嫌いだと感じてしまうのは、今、何のために学習しているのかがみえないことが大きな要因になっていると考えられます。そこで、初発の感想を発表させ、教師と話し合いながら学習の見通しを立てさせましょう。自分たちでこの教材をどのように読んでいくのか、何時間ぐらいで読んでいくのか見通しを立てることは、主体的に学んでいこうとする態度を育てる第一歩です。

また、高学年では、初発の感想からどの場面に関心が動いたかを全員で話し合い、心が動いた理由を考えながら、他の場面を関連付けて読んでいくことも可能でしょう。こうすることで、児童は自分たちの感想を生かしながら、楽しく読んでいくことができます。逆に最初から最後の場面までを同じ比重で機械的に読んでいくのでは、読むことの意味や必要性を見いだせず、興味を失ってしまうかもしれません。

表現や叙述と関係付けて、人物の心情について考えさせる

教師が心情の変化を読みとらせたいために、「主人公の〇〇はどんな気持ちだったでしょう」という発問をする場面がよくみられます。しかし、場面ごとに読んでいくたびにこうした発問が繰り返されると、児童は、文学作品自体に興味を失ってしまうばかりか、教師が解答として求めている答えを予想して発言することにもなりかねません。これでは主体的な読みの力を育てることは難しいでしょう。

「会話」や「行動」、さらに「情景描写」等の表現を根拠にして登場人物の心情について話し合いをしていくことが大切です。「気持ち」の隠れている文や言葉を探し、それらをよりどころにして言語活動を展開できるように指導することで児童主体の読みを促しましょう。

3 単元の終末には自分が学んだことの振り返りを大切に扱いましょう

学習してきた内容を振り返る

今まで学習してきたことをノートをめくりながら思い出させ、一番好きな場面を音読させるのも一つの方法です。最初に読んだ頃の読み方と比較し、読みが深まったために音読の仕方が変わったということを教師が児童に伝えることは、読むことの楽しさを児童自身に自覚させることにつながります。

また、振り返りの中で、友達と読み方や感じ方の違いが明らかになった話し合いの場面があれば、その場面をもう一度取り上げます。そして、一人一人に様々な読み方があったことで深く読むことができたことを賞賛し、教室で読むことの意義や読みの交流の大切さを実感させます。

さらに、同じ作者の作品や関連する読み物について、学校図書館にある本を紹介したり、教師の感想も交えながら部分的に読み聞かせたりすることで、児童の興味・関心を高め、ふだんの読書生活にも生かすことができます。

学習のねらいや方法について振り返る

時間数の少ない中で自己評価を行おうとすると、一般的には、評価カードに記号で記入していく方法などがとられますが、形式化してしまうことも多いようです。そこで、多少時間はかかりますが、学習してきた道筋を振り返る中で、この作品を読んだ方法自体のよさを考えたり、同じような読み方ができる作品を探したりするなどの場を設けたいものです。例えば、次のような方法が考えられます。

- ある単元で、「主人公への手紙を書く」という言語活動を取り入れた場合、その方法は読み深めるうえでどのように役立ったか、話し合う。
- 「動作化」を使って読み深めた単元であれば、「動作化すると主人公の気持ちがよく分かる」ことを確認し、さらに、「動作化」を取り入れると読み深めることができると考えられる作品を図書館に行って探す。
- 個に応じた指導などで学習方法を選択させて読み取らせた場合には、自分が選択した方法には、「どんなよさがあったのか」を考えさせる。

このように、国語の学習としてどのような力が身に付いたのか、あるいは、学習の方法は効果的であったかなどについて教師と一緒に振り返ることで、児童に達成感を自覚させ、主体的に読んでいくことへの自信を与えましょう。